

2019年1月15日

小金井市長 西岡真一郎 様
小金井市教育委員会生涯学習部長 藤本裕 様
小金井市環境部長 柿崎健一 様
(写 東京都教育庁 地域教育支援部管理課)
(写 東京都環境局)
(写 東京都水道局 経理部管理課)

小金井玉川上水の自然を守る会
代表 加藤嘉六

「玉川上水・小金井桜整備活用計画」についての意見書

日頃よりの、市民福祉の向上及び市政発展へのご尽力に対し深く感謝するものであります。

さて玉川上水における樹木伐採は「玉川上水・小金井桜整備活用計画」の絶対条件なのか。計画及び事業手法は適切なのか。このことを検証してみたいと思う。

2006年(平成18年)3月5日、小平ユネスコ主催の「連続市民講座—玉川上水の景観管理の現状と課題」講師・亀山章氏(東京農工大学教授)が小平市福祉会館で開かれた。

名勝「小金井(サクラ)」の項目で亀山教授は「淀橋浄水場の廃止に伴い自然環境と景観と言う面から玉川上水が再評価されるようになります。それを受けて『歴史環境保全地域、都市景観軸』と言うように玉川上水を緑地帯として見るようになって来ました」と自然を認めつつも、「玉川上水のキーワードは、一つは『緑』と『自然』、名勝のサクラ、そして史跡です。『景観』は、それぞれの時代ごとに捉えられており、それぞれが、対立関係になることもあります。例えば、ケヤキとサクラの対立などです。それが名勝・史跡と緑・自然との対立関係になっています」(連続市民講座講演集抜粋)と話された。

また、2009年(平成21年)1月17日、小金井文化財センターでの「名勝小金井桜の会」学習会・例会で講師の亀山教授は次のように述べられている。
水道局・・・土地は所有しているが、水道局がなぜサクラを植えなければいけないの。

建設局・・・(柵内の水道局用地など) 緑道外に建設局は植えられない。

教育庁・・・今ある桜が植わっている状態が文化財、新たに植えることは考え

に無い。

いずれにしても枯れたあとに新たに植える計画は現在のところまったくないようである。(玉川上水再々発見の会のレポート抜粋)

この講演では教授の研究室の学生・柚木さんの卒論研究内容(小金井サクラの現状について)の報告があった。それによると、「補植する場合はフェンスの内側など踏まれにくい場所を選ぶなど、対策が必要と思われる」とある。

この研究論文の詳細は以下のようである。(以下、研究論文より抜粋)

名勝小金井の現状と保護に関する研究・東京農工大学農学部地域生態システム学科 柚木英恵

5. 名勝小金井復活のための提言

以上の結果を基にして、名勝小金井(サクラ)復活のための管理方法として、ケヤキを伐採して、さらに上水際の安全柵内にサクラを植栽することを提案する。小径木ほどケヤキによる被圧の影響を受けやすいという結果から、ケヤキの伐採はサクラの若木の育成のためには必須である。伐採後にケヤキは萌芽しやすく成長速度も大きいことから、伐採後に5年に1回程度の剪定や伐採が必用となる。

さらに「小金井玉川上水・小金井桜整備活用推進委員会」議事録を見ると、小金井桜整備活用実施計画にある東京都の役割では、各所に齟齬が目立つ。また、暑い夏に水もやれないような玉川上水と言う特殊性から来る初歩的な問題に直面している。これは上記の計画が、最初から多角的に吟味検討されたものではなく、先に述べたように学生の卒論を現実化しようとして、元々の小金井桜が植わっていたのかハッキリしない、また手入れのために立ち入ることのできないような場所を選ぶなど計画の綻びが露呈してきたのである。「玉川上水・小金井桜整備活用実施計画」は実に杜撰な計画だったと言わざるを得ない。中でも平成30年2月26日開催の会議では「苗の実生か接ぎ木か」が問題になっており、40パーセントがヤマザクラでない、雑交したものと椎名豊勝委員(樹木医)は言っている。これは小金井桜復活を求める市民団体内部でも問題視する発言を耳にするところである。小金井市が予算を付けて買い取っている苗木のうち、40%はヤマザクラではないのであれば、市民団体に苗の育成を委託し買取を行っている予算及び行為が適切なものかどうか、明らかにする責任が生じる問題である。

小金井市には実態を精査し明らかにして、そのうえで今後の計画推進についての考えを市民および関連自治体にも説明する事が求められる。

以上に対する市の見解を、速やかにご回答願いたい。